

農村女性の就労状況と意識の現況

—山形県庄内地方の事例（一九九〇年時点）—

永野由紀子（東北大学）

今日の農家・農村をとりまく困難な状況は、もはや楽観を許すものではない。このような状況にたいして、個々の個別農家はなんらかの形で対応し、農家経営を維持するように迫られている。全国的に見ればかなり「恵まれた」条件のもとにある山形県庄内地方においても、今日の厳しい農業情勢のなかでも、もはや水稲単作のみでは農家経営を維持することが困難となり、水稲を基幹としながらも農外就労とプラス・アルファを組み合わせた多様な経営形態が、これらの状況に対する農民的対応の結果としてあらわれてきている。このような多様な経営形態は、家族員の多就業状況をもたらし、従来の農家・農民の生活を大きく変化させた。このような変容は、当然農村女性の生活や意識においても現れてこざるをえない。これま

での研究のなかで、農村女性は、農家経営において果たすその役割の重要性は指摘されていたものの、経営責任・経営担当者という観点からはどうしても見落とされがちであった。このような農村女性に着目することで、困難な状況に対する農民的対応の結果に至るまでのプロセス、すなわち経営形態の多様化や多就業という形態で、なんとか農家経済解体の危機を回避することに成功した、各個別農家の対応の結果に到るまでの家業経営体としての家内部の緊張と葛藤の過程が明らかになってくるのではないだろうか。

このような課題意識のもとに、一九九〇年の山形県酒田市北平田地区と鶴岡市京田地区における農村女性を対象とした調査はおこなわれた。対象者は、経営形態ごと嫁・姑といった家族内地位ごとに片寄りのないように選択した。その結果、今日の庄内の農村女性の就労形態は、多就業状況を反映してかなり多様であるということが明らかとなった。それはいわばドロコンコになって一日中農業する嫁と主婦権をもち家事・育児を担当しながら自給畑を耕す姑というかつての図式とは、随分様相を異にするものであった。農業には農業期以外ほとんどタッチせずに、現金収入の担い手として恒常的勤務に従事する嫁世代の数的に大きな存在。またその逆に農業就労せずにプラス・アルファ基幹労働力や水稲、プラス・アルファの農業補助労働力として農業に専従する嫁世代の存在も庄内地方では少なくない。施設園芸を中心としたプラス・アルファ部門の進展とともに、農業労働力としての女性の重要性は一層増大し、農作業の現場において女性が中心的に活躍する場ができていくように思われる。また水稲やプラス・アルファの農業補助労働にまわりながら、空いた時間を臨時や内職などの農外就労での現金収入に割くといった、

多岐にわたる活動分野をこなす嫁世代も存在する。さらに農村女性の場合、男性と比して大きな位置を占めているのが、老人の世話や育児をも含む家事労働である。家事労働という観点にたつならば、主に家事・育児と自給畑を担当する姑世代が農家経営において果たす役割の重要性は、その家の嫁世代が農作業や農外就労に専従できるといふ意味でも決して軽んじることはできない。このような伝統的な姑世代の役割にたいして、後継者夫婦がともに常勤であるといった理由のために、姑世代でありながら重要な農業労働力となっている層の存在は、今日の農業情勢とのかかわりで新たに姑世代にかけられた役割として注目される。

このような家族内役割分担からうかがえるように、農村女性には、生産面のみならず生活面をも含む重層的な役割分担がかかってくる。その結果、今日の農業情勢のもつ矛盾や家族労働力の減少によってもたらされる負担は、男性よりも女性の側に過重労働というかたちでより強く現れてくる。なかでも農業専従層を中心に農業労働にかかりの時間と労力を傾けている農村女性の過重労働の問題は深刻である。しかし彼女らは苛酷な負担にただ耐え忍んでいるわけではなく、彼女らは、かなり厳しい労働状況のなかでも、生産の喜びややりがいを感じつつ意欲的に活動している。そこにはいわば自負心をもって過重な負担を積極的に担っているとも言えるべき状況が見いだされた。このような意欲的な営農意識は、自己の生活基盤が農家であるということに何の疑問ももたなかったり、農家の嫁だから当然というかたちで自己に与えられた役割を自明視し、何らの捉え返しもされない状況のなかではなかなか生まれにくい。今日の庄内地方の農村女性は、サラリーマンの生活と対比しながら、けっこう冷静

に農家・農業のよい点と問題を考慮している。このような客観的な考慮のうえにたつて、彼女らは自己に与えられた役割をいったん對象化しその意味を捉え返し、家族員の期待やその役割の家族内での必要性、自分の位置といったものを配慮したうえで、なんらかのかたちで自己了解し納得してその役割を遂行しているものと思われる。それは、「自分がやらなければしょうがない」というかたちでのいわば消極的な決断ではあつても、十分な自己了解のもとに納得した結果であれば、やはりひとつの「選択」といえるであろう。このような自己の内面での緊張と葛藤の過程を経てはじめて、庄内地方の農村女性は、最初は必ずしも本人の志向や希望と必ずしも一致するとは限らない家業経営体としての家の役割期待に応え、積極的に自己の役割に取り組んでいる状況が調査の結果明らかにされた。しかし、このような宮農意欲をもった女性でも、というよりは意欲的にとりくんでいる女性であればあるほど、「今だったら農家には嫁がない」とはつきり言つてのけるようなギリギリの状況がそこにはみとれた。その意味では、緊張と葛藤の過程を経て形成された意欲的な宮農意識は、今日の農業情勢のなかで常に矛盾を孕んだものであり、常に緊張と葛藤を内包しているという側面を見落としてはならない。

以上見てきたように、一九九〇年の庄内地方の農村女性の調査の結果、農村女性の就労状況に現れた家族内での役割分担は、かつての家族内地位に応じて与えられた伝統的な役割から見てかなり多様化し変容してきていることが明らかになった。そしてこのような役割期待に応え、それを意欲的に遂行する農村女性の緊張と葛藤を孕んだダイナミックな意識の展開過程が明らかにされた。今日の庄内地

方の農村女性にみられるこのような生活および意識の変化は、当然農村家族の在り様を大きく変化させた。それは明らかにかつての伝統的な家とは質的に峻別されるような性格のものである。しかしこのような今日の農村家族に現れた変化は、必ずしも家業経営体としての家の解体を意味するものではない。というのは、今日の厳しい農業情勢に対する各個別農家の対応は、農村女性にあらたに課せられた役割の遂行、しかもその意欲的な遂行に支えられてはじめて成り立つようなものだからである。言い換えると、農村家族がその性格を変化させることによってはじめて、今日の困難な状況に対する各個別農家の対応は可能になったのである。この意味で、今日の農村女性および農村家族に現れた変化は、質的变化の側面を含みつつあくまで「変容」として捉えられるような性格のものであり、家業経営体としての家の「解体」を意味するものではないといえるのである。

全国的に見ればかなり「恵まれた」条件のもとにある庄内地方も、もはや相対的に見れば「恵まれて」いるとしかいえないほどに、今日の農業情勢は日々厳しさを増している。このような状況のなかで農家経営において農村女性が果たす役割の重要性は今後ますます増大してくるものと思われる。その意味では、農村女性がその諸能力を十分に生かし意欲的に活動できるための「条件づくり」が、今後ますます必要になってくると思われるのである。